

慶應のバドミントン部

ライター：大西芙蓉子、エディター：川崎萌

2月の冷え切った日吉記念館。シャトルを打つ音が二階席にまで響きわたる。そして3時間にわたる練習を終えると、選手たちはひとりずつ監督とぎゅっと握手を交わした。

慶應義塾大学体育會のバドミントン部女子チームは現在、現役部員はわずか4人。強豪校出身の選手もいれば、有名な進学校出身の選手もいる。それぞれが様々な過去を持ちながら、大学生活をバドミントンに懸けると決意した。1942年以来の歴史を背負う彼女たちは、決して強いチームとはいえない。しかし、ここ数年で目覚ましい結果を個人でも団体としても残し、躍進を遂げている。

彼女たちの軸は「考えるバドミントン」である。バドミントンといえば、そのシャトルの速さが特徴として挙げられることが多いが、選手の身体能力や精神力はもちろん、ゲーム内の高度な駆け引きと戦略が勝利のカギを握るのだ。だが彼女たちにとって「考えるバドミントン」とは、頭を使って自分のプレーと向き合うことだけを意味するわけではない。チーム全体の運営や勝利といったことに対しても惜しまず試行錯誤する必要があるのだ。というのも、他の大学、そして慶應内の他の多くの部活とは異なり、部則がなく、そしてマネージャーもないからだ。もちろん実力差もばらばらなため、4人だけで部活を成り立たせるには一人ひとりの主体的な行動が不可欠である。こうした姿勢は日々求められ、一年生のころから自然と鍛えられるため、大学の友人や他の体育会所属の選手たちからも一目置かれるようだ。

人数が少ないのには理由がある。多くの大学は、強い高校生を選手としての実績をもとに直接チームに入れることができる。しかし「部員である前に塾生であること」を重視する慶應の場合、高校生が、大学の設けた入学試験に合格しなければならない。勧誘担当の川原優選手（20）は、自ら全国あちこちの高校生の大会に足を運ぶ。そして顧問の先生に声をかけては、学力の高い生徒を紹介してもらい、その生徒たちに入学試験を受けるよう慎重に働きかけていくことから始める。実力重視の勧誘でないため、バドミントンで強いチームを作るには効率的な方法ではない。しかし、誰に対しても開かれているという点ではメリットも存在する。

「慶應は強くしてくれる大学。高校までで勝てなかった人も、大学では勝てるようになる。」それは彼女自身、そして他のチームメイトが立証している。他の大学と比べると、練習量が多いだけでなく、選手の向上心も高いと自負する。

「自分が引退するまでにいろいろ残したいと考えている。」こう話すのはキャプテンの小松鮎実選手（21）だ。彼女は選手としても結果を残しながら、運営方針も自ら主導し、改革をしてきた。HPの改良、部員によるブログ、高校生との交流イベント。その端々で、大学の授業で学んだことが生かされている。そして現在はロゴも開発中で、グッズの販売も視野に入れている。いっぱいいっぱい顔をしめながらも、その目はまっすぐ未来を

見つめていた。

編集後記

彼女たち、バドミントン部員の等身大の姿を通して、多くの人が歩まなかった體育會という大学生活を身近に感じていただければなによりだ。

大西芙蓉

子